



TITLE:

# 人口に関する小論 - 向坂逸郎氏の 批評に答ふ -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 人口に関する小論 - 向坂逸郎氏の批評に答ふ -. 經濟論叢  
1933, 36(1): 23-37

ISSUE DATE:

1933-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130275>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟叢論

第一號

第三十六卷

昭和八年一月一日發行

## 新年特別號

インフレーションと財政策	法學博士 神戸 正雄
人口に關する小論	文學博士 高田 保馬
社會的に妥當なる農業經營規模に關するベルンハルデイの見解	經濟學士 八木芳之助
操短と生産費	經濟學士 大塚 一朗
資本論と一般均衡論	經濟學士 柴田 敬
中央銀行役割の發展に就いて	經濟學士 松岡 孝兒
預金通貨の貨幣的性質に就て	經濟學士 中谷 實
ケトレー直後の英佛統計學	法學博士 財部 靜治
土佐の育子策について	經濟學博士 本庄榮治郎
爲替心理説の批判	經濟學博士 谷口 吉彦
宇和島藩の蠟專賣	經濟學士 堀江 保藏
琉球農村共同體 <small>（我國民理想としての）</small> 『國民共同體』	經濟學博士 石川 興二
地方財政の改革	經濟學博士 汐見 三郎
漁業組合論	經濟學士 蜷川 虎三
二ツのインフレーション	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁轉載）

# 人口に關する小論

——向坂逸郎氏の批評に答ふ——

高 田 保 馬

## 一

私は人口と生産力又は生活資料との關係について、かつて一の試論を企てた。ここにその要領を再說すると共に、再考を加ふべきものは再考を加へようと思ふ。而してその序を以て、かつて向坂逸郎氏によつて加へられたる批評に答へることにする。

私はまづ人口の靜的法則を提示する。社會の低き階級の人口を $B$ とし、其生活標準を $S$ とする。又其社會の生産力を $P$ とし、此階級に對して生産力によつて生産せられたる生産物のうちから、此階級に與へらるる割合を示すところの係數、即ち分配係數を $d$ とする。さうすると、人口と生活標準との積は分配係數と生産力との積に等しい。此關係は次の方程式を以て示される。 $B \cdot S = d \cdot P$  この主張は次のことを示す。人口と生活資料とが釣合を保つか否かと云ふ關係は、人口と生活資料、從つて生産力だけの二者を對立せしめたのでは明にせらるるところがない。生活標準と分配係數の二者をとり入れて考ふことが缺くべからざることである。而して人口増加の傾向は不

斷に此均衡をかきみださうとする。然らば均衡は如何にして回復せらるるか、これは人口の動態に關する問題である。此均衡の恢復は生活標準の一般的低下によつて、分配係數の變更によつて、生産力の増加によつて、實現せらるることが出来るはずである。けれども、生活標準の低下は容易のことではない。分配係數の變更も急速には行はれぬ。そこで、人口過剩の傾向は大體に於て生産力の増加によつて打ちかたれてゐる。生産技術、從つて勞働の生産力は時々飛躍的な増加を遂げてゐる。これには海外植民地乃至海外市場の急速なる開拓をも併せ考ふことを要する。そこで、此生産力の増加が何によつて促さるかが一の重要な問題として残る。これは分配係數が如何なる事情によつて決定せらるるかと云ふことと共に、私の取扱ふべき重要な問題である。

生産力の増加は何から來るか、唯物史觀の立場を貫き通さうとする限り、それは根本に於て自動的に云ふ外はないであらう。もとより、自然科學的知識及びその他の數多の因子の反作用は認められねばなるまい、けれども、その立場からは生産力は歴史を推進する自己運動者である。自ら動くものは根本に於て他から促さるるをまつものではないであらう。けれども、それは生産力の増進についての説明を斷念することとならないであらうか。

私見によれば、生産力を本來自己運動的のものと見ることは、歴史の説明を中途にして拋棄することである。生産力の變動はそれ自體他のものによつて説明せらるべきものである。而して何

が生産力を變化せしむるか、生産力は勿論種々なる事情、條件によつて變化する。けれども此變化の中心的なるものは、生産技術の變化である。而して此變化をもたらしめるものは、一般的なる競争より外にはない。此競争を以て單なる生存競争と見ることは、社會ダアヴィン主義に陥ることであり、又あまりに事實からかけ離れることである。人間の社會の競争の目的物となれるものは生物的生存と云ひがたい。また單なる優越の欲望に基くものと見るのは、社會事象の一切を個人心理的なる動機又は要求によつて説明すると云ふことになり、其背後に作用する社會の作用を忘るることになるであらう。社會の組織の中から社會的勢力——ある中心に對する成員の服従——が生れる。此勢力の作用によつて優越の要求と云ふものがはたらいて云はば現勢的となつて来る。そこに體面の要求、漢民族のいはゆる面子の要求と云ふものが成立する。體面の要求と云ふは社會的勢力の相互誇示に外ならぬ。此體面の要求が如何なる生活方面を通して、又如何なる程度まで、社會生活の上に作用することを許さるかは、社會の歴史的事情によつて異なる。私は今これを、主として近代的事情について述べよう。私のさきに掲げたる人口方程式は單に社會の低き階級にあてはまるのみならず、S 卽ち生活標準に適當なる解釋を加ふるときは他のすべての階級の人口法則として認められることが出来る。『特定の生活標準は常に二の部分から成り立つ。一は生命の存續維持の爲の絶對的必要額にして、他はその上に高め上げられ、云はば附加せられたる部分、即ち力の欲望の満足のために要求せられたる額である。此後の部分が無產者又は最低階級の場合

にありては、ただ力の欲望をみたす爲の消費財を意味するが、他の階級の場合にありては、必ずしもさうでない。自己の社會的體面を維持すると共に、増加しゆく人口をして此體面を維持せしむるが爲に、新に獲得することを要するだけの財、若くは價額を意味する。若し生活標準と云ふ言葉がこれらのものを併せ意味せしむるに不都合であるならば、それを例へば標準的生活要求とも云ひかふべきである<sup>1)</sup>。而して生産力が如何にして増加するかを考ふるに當つても、低き階級のみについて考へたる人口方程式の各項のみに考察を限る必要はないことになる。

生産力の近代的増加は如何にして行はれつつあるか。勿論、技術の發明が自然科學の發達に負ふこと、發明的天才の利欲を離れたる云はば自己目的的な努力によることを否認するのではない。けれどもそれらを産業の中にとり入れ、生産力の増加として實現せしむるのは、常に産業的活動に於て能動的地位を占むる人人のことである。以前に於ては獨立の小生産者がそれであつた。今日に於ては、云ふまでもなく、企業者がそれである。此等の階級に於ても人口は、社會の特別な禁壓がない限り、人口は増加しようとする。而もそれはつねに體面の維持、發揮を困難ならしめようとする。ことに兒孫をして同様なる社會的地位を保たしめようと考ふる限り、さうである。體面に關する要求は人口の壓迫を離れてもなほ作用しようとする。社會生活が傳統の束縛から愈々つよく解放せられ、所謂利益社會化の傾向が顯著となる以上、體面を維持し、又進みて發揮しようとする相互誇示の努力は愈々加はつてゆく。前の方程式について云へば、Bが増加しよ

1) 人口と貧乏 一八八頁 價格と獨占 三一九頁。

うとするばかりではない、Sもまた上昇しようとする。勿論このことは私が究局に於てまでSに自動性を認めようとするのではない。それは人口増加の間接なる結果に外ならぬ。人口増加にもとづく社會的事情によつて促さるるものである。人口の増加の壓迫から體面が維持されがなくなるか、それでもなくとも、體面の要求を強く満足せしめようとする爲に、企業者の手によつて社會の生産力が増加せられてゆく。生産力は單獨に、自動的に變化するのではない。人口の直接なる、又間接なる作用によつて前方に押しやられる。而してその飛躍的前進が行はるる場合には、人口増加の新なる餘地が作られてゆく。

## 二

次の問題は分配係數が何によつて決定せられ、何によつて變化するかと云ふことである。私は人口問題の取扱に於て未だ一たびも之に論及したることはない。けれども社會學に關する著作に於てはたびたびこれを論じてゐる。

分配係數と云ふ表現が十分のものであるかは問題とすべき點であるが、それには後に論及する。分配係數を決定するものはすべて社會的勢力關係である。私のしばしば説明したるが如く、經濟的勢力即ち廣義に於ける富の分配はすべて社會的勢力の分配によつて決定せられる。云はば社會的勢力の分配の線に沿うて行はれる。このことは封建時代について最も明に看取せらるるところであるが、資本主義社會についても、根本的に趣を異にしてゐるわけではない。今日、無產者は

貧しきが故に弱い。即ち經濟的弱者であるが故に社會的弱者であると見られてゐる。個人個人についてみればさうであらうが、階級としてみると、事實はまさにその逆である。貧しきが故に弱いのではない。弱いが故に貧しいのである。さうでなかつたならば、無産運動の漸く力を加ふるにつれて、其經濟的地位のいくらにても改善せらるる事實は如何にして説明し得らるるか。無産者の政權の獲得によつて富の分配の變改せらるることは如何にして説明し得らるるか。

社會的全生産物のうち、どれだけが無産者階級に與へらるるかを示すところの數式的表現に分配係數と云ふ名稱を與へることにする。これについて、私が天秤の例をかりて與へたる表現は正確であるとは云ひがたい。その場合、 $d$ はある定まつた値をもつところの、而して生産力の動きには關係のない數と見られてゐた。即ち生産力の一定の割合が例へば無産者の階級に與へらるるものと見られてゐた。けれどもかう云ふ表現は事實と合致し得ないであらう。社會的全生産物のうちから、どれだけ無産者階級に與へらるるか、かかる一定の數値(例へば分數)を以て示さるべきではあるまい。これはむしろ、一方社會的勢力關係によつて、他方社會的生産力の大きさによつて決定せられてゆくところのものであり、従つてこれらの函數として表現せらるべきものであらう。分配係數 $d$ は社會的勢力關係によつて決定せらるることは云ふまでもないにしても、此勢力關係が與へられたるままである場合でもそれが一定の分數であり、従つて無産者階級の所得が生産力に比例して増減するものと見るべからざることとは、云ふまでもないことである。事實に於て



は、勞銀が著しく安定的性質を有し、生産力が増加しても、その割合に増加せず、生産力が減少することがあるにしても、その割合には低下しない。此事實はただ勞銀を社會的勢力關係及び生産力の函數として見るときにのみ、十分數量に表現せられるであらう。分配係數と云ふ表現を固執するとすれば、それはかかる自變數の函數として決定せらるるものであり、例にひいたる天秤の支柱の位置は生産力の變化につれてまた變化するものと見られねばならぬ。

そればかりではない。經濟的勢力即ち富の分配は、決して單一の方法に於て行はるるとは限らぬ。今日の組織に於ては二の方法に於て行はれてゐる。其一は經濟的分配である。これは大體可變資本の回轉として行はるるものと見うる。其二は政治的分配である。經濟的分配のみが終局の分配を決定するものではない。社會的勢力關係はまた政治の機構を通して、再分配を行ふ。而して此二者の綜合的結果として、富の分配のまことの姿が決定せられる。ただ、經濟又は交換の機構を通すことによつてのみ、分配が行はるると見る立場からは、人口法則乃至人口問題のまことの眞相はつかまれ得ない。

これだけの説明を加へたるのち、私はさきの人口方程式を中心とする私見をなほ一度振返つて見ようと思ふ。

人口方程式として示したるものは、人口の靜態又は均衡の狀態である。しかし人口は寸時も完全なる均衡の狀態にあり得ないであらう。此變動はもとより種々なる方面からひき起される。けれ

ども、其根本的なものは人口の自動的增加である。此自動的增加の程度如何が社會的事情の制約の下に立つことは云ふまでもない。而して、他方に於ては生産力が變化してゆく。それは根本に於て人口からの壓力の下に立つにしても、直接には社會的事情そのものによつて促進せられる。而して、その増加は人口増加よりもかへつて大なるが故に、徐々ではあるが、低い階級の生活標準が不斷に高められてゆく。もとより分配係數が<sup>つねに</sup>變革さるる傾向がある。けれども、それはむしろ社會の階級組織そのものの變革として行はるるものである。更に一層立入つて云ふならば、人口増加の結果として、社會組織の姿が決定せられ、此社會組織に決定せられて成立したる體面の爲の競争が生産力を増加せしめ、一方は此増加、他方は社會組織によつて定まれる分配係數の共同作用によつて低き階級に與へらるる生産物總量が定まる。此總量は生活標準の若干の向上を許しつつ、人口増加の限度をたえずかぎりつつある。生産力による人口増加の制限は人口自らの間接的な自己制限である。社會に於て自己運動を營むものは人口の外にあり得ない。

人口の自己運動、社會中心の歴史觀、力の欲望に基く社會發達觀、社會的勢力による經濟の被決定性、これらの一團の知識乃至主張は、私見に於ては相聯絡して離しがたい一體をなしてゐる。私の人口法則は私の社會學的考察のただ一側面たるにすぎぬ。

## 三

私はかう云ふ立場の上に立ちて、かつて向坂逸郎氏によつて加へられたる批評を吟味しよう

思ふ。

向坂氏の論點は大體二に分れるやうである。一は私の人口方程式は階級を抽象するが故に、階級的社會の人口理論の出發點となり得ないと云ふこと、二は資本家的社會に於ては人口増加によつてみださるる均衡の確立せらるる過程が私の云ふ主要過程によらずしてかへつて主として所謂副次的過程によること、従つて中心的人口法則は特殊的資本家的社會の人口の運動を説明しないと云ふこと。主要の論點は前の部分に置かれてゐるが、私は順次に之を吟味しよう。

『先づ所謂人口方程式そのものについて考へて見る。』

$$dP = P \cdot S$$

に於て、此式の兩項  $dP$  及び  $P \cdot S$  が何等かの意味を有するのは、恐らく  $d$  が一に等しい場合、即ち社會に於ける分配が平等であり、従つて又生活標準が單一である場合のみではないか？『併しながら  $d$  が一でない社會、従つて又生活標準が單一でない社會に於て、 $dP$  及び  $P \cdot S$  なる二の式（——高田附記）を以て全社會の成員を一方の階級（低い方の）の基準に引きなほしてその必要量と供給量とを見出して見た所で、それは何等その社會の實相を反映しない。階級の存在を前提とする限り、又分配の不平等を前提とする限り、従て又不等なる生活標準の存在を前提とする限り、かかる式は意味を有し得ない。なんとすれば之等の前提の存立自體が此の式に於て行はるるが如き約元を不可能にしてゐるからである。有産者と無産者と對立する資本家的社會に於て、有産者の生活が無産者のそれに引なほす事の無意味を立證するものは此の對立の事實自體ではないか。』教授は、分配係數  $d$  を考案された時には、明かに階級の存在を意識されてゐる。が之を以て  $dP = P \cdot S$  なる方程式を作り上げられた時には、既に階級の存在を忘却又は抹殺して了はれたのではないか。かくて私は信ずる。 $dP = P \cdot S$  なる方程式は階級社會の人口理論の出發點とはなり得ないのではないかと。何者、それは階級を抽象するが故に。』私の拙い感想は、此處で終りにしてもいいようでもある。』

向坂氏の論文に先だつこと半年、私は『私の人口理論』に於て次の如くにかいてゐる。『社會成

員の大多數を占むる最低階級の生活標準をSとし、その人口をBとし、一方その社會の生産力をPとし、該社會の生産總額が該階級に分配せらるる比率を分配係數dとするときには、 $BS = d \cdot P$ と云ふ人口方程式が成立する。而して此均衡の攪亂せられてまた確立せらるる道行は次の如きものである。人口は多くの社會に於て増加の傾向を有するが、右の方程式中にて人口(B)が大となりたる時は、此均衡の維持せらるる爲には、生活標準(S)が小となるか、又は生産力(P)或は分配係數(d)が大とならねばならぬ。しかし生活標準は下げにくいし、又分配係數も容易に變化せぬから、結局生産力即ちPの増加を來すべき力が強くはたらく。その結果、生産力が徐々に又は飛躍的に(技術の進歩によりて)増加する。此増加は時には人口の増加に及ばず、時にはそれより先にすすむ。後の場合には生活の標準が高まる。かくて人口の増加、生産の増加、生活標準の上昇の三者は循環的に來る<sup>5)</sup>。』

向坂氏は私が「全社會の成員を一方の階級の基準に引き直してゐる」と云ふことを、論難の的にしてゐるけれども、私の引用したる一節は私がさうしてゐないことを明示してゐる。私は低い階級即ち無產者階級は無產者階級として取扱ひ、それと其生活標準との積を此階級の獲得するところの生産物總量と對比せしめたのである。他の階級を低い階級に引き直したのでもない。従つて其論難はあまりにも徒勞である。 $dP = RS$ の方程式を作り上げたときに階級の存在を忘却又は抹殺してゐると責めらるるけれども、Bは無產者階級の人口であり、dは此階級の與りう

る分配の大きさを示す分配係数である。階級の對立を忘れてはならぬ。私は、「私の人口理論」の全體をもう一度よみかへされよとすすめる外に云ふところはない。否、向坂氏は自ら『分配係数は社會的全生産物のうち社會組織によりて、どれだけが此階級に割當てられるかの程度を示すところの數量』と云ふ私の文句を引用してゐられる。これでは自家の議論を自らこわされてゐるのではないか、かうなるともはや議論になつてゐない。

向坂氏の論難は私の人口理論が資本家社會の人口法則を説明し得ないと云ふ點に及んでゐる。

『教授(高田)によれば、一般的には、現在の生活標準を維持しつつ、増加したる人口が生存すると云ふことは、漸次困難とならざるを得ぬ。此壓力は何所かに向つて放散されざるを得ないであらう。』『事實に就いて見るに、分配係数はそれが社會組織ことに社會勢力關係の結果である以上容易に大なる方へは變更せられがたく、又生活標準も後に説くが如き事情からして變更せられがたい。其結果として、此人口増加の壓迫は先づ、而して最も強く生産力の上に加はることになる。』『所が資本家的社會の人口には副次的過程の顯著なるものがある。それは此處には「利潤のための激烈なる競争」が行はれ、「此利潤は重に生産力の増加によりて獲得せられる」事である。』『若し生産力が必ずしも人口の壓力をまたず、主として利潤獲得の競争によりて發展するものであるとすれば、人口の生産力に對する壓力の必然性は、資本家社會に於ては否定されなければならぬではないか。』

此論點について私はただ次の如くに答へる。私の人口動態に關する見解の重心は人口の増加、生産力の増加、生活標準の増加が相伴ひ來ること、生産力の増加が人口増加よりも著しく、従つて生活標準の上昇を許すことにある。生産力の増加が人口増加の壓力によるか否かは主要なる論點ではなく、それは何れにてもよいことである。人口の増加に伴ひて生産力の増加が生ずるにして

6) 貧乏と人口 四八頁。  
7) 向坂逸郎 貧乏と人口

四四—四五頁 拙著 人口と貧乏 一八四頁。

も、人口増加の生活の上に加へる壓迫と解せられねばならぬと云ふことはない。従ひて私が資本主義社會の生産力増加を利潤獲得の競争に基くものと主張するだけに止めたところで、それによつて私の重點が失はるるわけではない。況んや、此利潤獲得の競争によつて生産力が増加するにしても此競争の強さが企業者たちの階級内部に於ける生活の壓迫、人口増加の壓力に基くことは、前に述べたる通りである。私はすでに生産力の増加が利潤獲得の競争にまつことは、やがてそれが人口の壓力にまつことであることを詳論した。向坂氏は枝葉の點について無用の論を敢てされたのではないか。これに關聯して、向坂氏は私の人口法則が資本家社會の人口を説明し得ずと云ふことにつき、次の如くに述べられてゐる。これは重要な論點である。

『更に教授は、此の如き方程式に於て、資本家社會の總人口に、此の社會の總生産物への參加が何時にても許容され得るか  
の如く取扱はれる事によりて、重大な落し物をしてははしなかつたか。そして此の落し物を見失ふ事は、實は資本家社會の過剰人口（從つて又資本家社會の人口理論）の問題への鍵を失ふ事になる。それは失業者だ。』『高田教授の人口方程式には、此の如き失業者は最初から除外されてゐる。何者、彼等は最初から社會的生産物の分配に與り得ないのだから「生産物の總額の中から、國民をしてかの生活標準を享受せしむる爲に分配せらるる部分」中には、彼等の食ひ物が、はいつてゐるやう筈がないではないか。そして又此の人口方程式に於ては決して失業者は出ない。だから極めて平和に人口の増加は生産力の發展となり、更に生活標準の上進となる。だが、資本家社會の人口理論は失業者即ち相對的過剰人口の問題に對する理論的考察なくしては、人口理論たり得ない。』

これについては簡單に答へる。私の人口方程式に於ては決して失業者は出ない、人口方程式には、此の如き失業者は最初から除外されてゐると云ふことから、どうして私の人口理論が失業を説

明し得ないと云ひ得るか。向坂氏は靜態又は均衡の意義を理解せられないらしい。人口方程式ははじめから均衡の敘述である。均衡はすべての人口が生活標準だけを享受しうることを前提としてゐる。失業や人口不足はすべて動態のことである。それが均衡を示す方程式の中に入り來らざることは當然のことである。マルクスの人口理論にしても此均衡状態は  $\frac{v}{c+v+m}$  (Lは勞銀、Bは人口)として示さるるはずである。そこに失業人口は見出されない。失業は左右兩邊が不等なる場合にあはれる。資本主義社會の失業については私の立場からいくらでも進みて吟味しうるところである。生産係數dは經濟的分配に於ける係數d<sub>e</sub>と政治的分配に於ける係數d<sub>p</sub>とからなる。而してマルクスに於ける表現をかれは、
$$\frac{v}{c+v+m}, v=d(c+v+m) \rightarrow d_p \text{ である。}$$
 ただマルクスはvとB、又はvとLとBとの關係だけから過剰人口の理論をたてようとした。けれども、それは生産物の政治的分配を忘れてゐる。それでは過剰人口のまことの説明が得らるるはずはない。今日世界を通じて三千萬の失業人口があると云ふ。彼等是如何にして生活を維持しつつあるか。これを如何にして説明しようとするか。向坂氏は靜態理論の中に動態事象の説明を求めようとする無鐵砲を考へるまへに、まづマルクス人口法則の修正を考へらるべきではないか。向坂氏が私見に對し詳細なる吟味を試み鞭撻を加へられたることに對しては、どこまでも感謝の意を表する。ただ其批評はすべて私見に對する理解の不足に出づと云ふ外はない。

序に云ふ。吉田秀夫氏は其論文『高田博士とマルサス』<sup>9)</sup>に於て、私を以て『徹頭徹尾マルサス主

義者を以て終始』するものとなし、私の批評したるマルサス説はマルサス自身の考とは別なるものであると主張されてゐる。私は正面から之を批評する意志をもたぬ。それは此論文が極めて杜撰にして學問的に無價值のものであるからである。ここには其杜撰であることの證據をあげるに止める。まづ同氏は私を以てマルサス主義者であると云はれる。マルサス主義、マルサス主義者と云ふ言葉は「マルサスの學説を信奉する」と云ふこととは異なれる意味をもつてゐる。此世界通用の意味をさへ知らないのであるか。また、同氏は所見の要約を述ぶるに當り、次の如くに記されてゐる。『上述せる所を要約すれば次の如くなる。一、博士(高田―筆者附記)はマルサスは性欲の不變と收穫遞減の法則とを根據とすると云はれるが、マルサスは性欲と生殖と異なると云ひ、又收穫遞減の法則には何處にも觸れてゐない。』マルサスは性欲と生殖とが異なると云つたところでそれが其人口法則の理論的組立に何等の變化を加へうるか。やはり「第二、兩性間の情欲は必要にして、且つ略々其現狀を維持すべしと云ふこと」と云ふ其公準を前提としなければ人口増加の幾何級數的であると云ふ主張は維持せられぬではないか。マルサスが收穫遞減の法則にふれてゐないと云ふのはあまりにも輕卒である。此法則を前提とせずして如何にしてマルサスは食物増加の遅るることを主張しうるか。如何にもマルサスは「人口の原則」に於て此法則の名稱をあげない(マルサスは本來此法則の創設者の一人と見られてゐる人である。)けれども、これが實質を論じてゐる部分はいくらもある(例へば (1) 1st ed. p. 25; (2) 1st ed. p. 107. note; (3) 2nd ed. p. 5; 7th ed. p. 4; (4) 2nd ed. p. 7;



(5) 7th ed. p. 5)。吉田氏はこれらの部分に注意せられないのであらうか。文献的研究を中心とする其論文に於てかかる妄斷をなすことは杜撰もまた甚しい<sup>10)</sup>。他の一例。『マルサスは道德的抑制を擧げるのみで人口の個人的制限の規範化を述べぬと云はれるが、マルサスは博士と比較にならぬ程詳細にこれを論じてゐる』と述べられてゐる。<sup>11)</sup>私が「資本主義後期の人口は漸次に此状態を實現せしめようとする」と云ふ「人口の個人的制限の規範化」は云ふまでもなく、出生の人為的制限(避妊の規範化である。マルサスが百年以前に之を詳論してゐると云はるる如き、でたら目も甚だしい。マルサスの學說に對する批評又は修正として此出生制限を最も重要視することは近代の人口學說の主潮流である。吉田氏はマルサス主義と云ふ言葉の意味を解せられざるほどに此潮流に對して盲目なのであらう。マルサスの全文獻のいづこに人為的出生制限の規範化をとける文句があるか、一言半句たりともあるか。吉田氏の論文の如何に杜撰なるものであるかは、これらの例が十分に之を示してゐる。今これ以上を説くまい。ただ、盲目蛇を恐れざる其勇氣に驚くのみである。かかる杜撰なる論文といへども無知なるものを誤り得る。無知なるものは假名の裏にかくれて云ふ。『批判者はしばしば人形師となる、嘗つて人口論上の論争において、批判者の一人は本物のマルサスとは似ても似つかぬ一人のマルサスなる人形を仕立ててしまつたので、大向の嘲笑の的となつたことがあつたのだ。』<sup>12)</sup>杜撰を指摘する所以である。

10) 此點については 伊藤久秋 マルサス人口論の研究 三六頁參照。  
Oppenheimer, Das Bevölkerungsgesetz, 1901. S. 18.

11) 前掲論文 七七頁。

12) 橋田三郎 地代論争を鳥瞰す 批判 三卷八號。